『正法眼蔵』再治の諸相

――懐奘筆『正法眼蔵』「仏性」――

角田泰隆

はじめに

道元禅師は、その著作に「再治」すなわち修訂を行っている。たとえば『普勧坐禅儀』は、長蘆宗賾本『坐禅儀』をもとに初稿本『普勧坐禅儀』を、そして初稿本から清書本（天福本）『普勧坐禅儀』へ、そして流布本『普勧坐禅儀』へと修訂が行われたことが知られる。

『正法眼蔵』においても、再治・修訂が行われ、その痕跡が今に伝えられ残っているものとしてここに取り上げた懐奘筆『正法眼蔵』「仏性」（以下《仏性》）がある。

福井県永平寺に所蔵されている《仏性》は、道元禅師が仁治二年（一二四一）に示衆された『正法眼蔵』「仏性」巻の草案本を、同四年（一二四三）に懐奘が書写し、後に道元禅師が再治された再治本によって正嘉二年（一二五八）に懐奘が校合し、修訂したものである。[1]

この《仏性》の影印は河村孝道・小坂機融両駒澤大学教授編集による『道元禅師真蹟関係資料集』（『永平正法眼蔵蒐書大成』別巻、昭和五十五年十一月、大修館書店刊）に収載されている。

駒澤短期大学研究紀要　第二十九号　平成十三年三月

また、本資料の翻刻は既に杉尾守（玄有）「道元における真如の問題」（『山口大学教育学部研究論叢』第二八巻第一部人文科学社会科学、一九七八・一二・三一）によって試みられている。これは不明な点を河村孝道・田島毓堂両氏の教示をうけながら杉尾氏が翻刻したもので、筆者も不明な文字はこれに従った。

さて、これらの成果・業績によりながら、《仏性》の再治が、どのように行われたのか。《仏性》はどのように修訂されたのか、その修訂の実際を詳細にみてみたい。

「仏性」巻再治の様子

＊上段は、河村孝道・小坂機融両駒澤大学教授編集による『道元禅師真蹟関係資料集』（『永平正法眼蔵蒐書大成』別巻、昭和五十五年十一月、大修館書店刊）に収載されている影印を、杉尾守（玄有）「道元における真如の問題」（『山口大学教育学部研究論叢』第二八巻第一部人文科学社会科学、一九七八・一二・三一）によって試みられている翻刻を参考にしながら、見やすくまとめたもの。削除された部分を棒線で消し、挿入された部分を【　】に入れて補った。下段に、修訂に関する筆者のコメントを述べた。

【【釈迦牟尼佛言一切衆生悉有佛性如来常住無有變易これわれらが大師釋尊の師子吼の轉法輪なりといへども一切諸佛一切祖師の頂顎眼睛なり参學しきたることすでに二千一百九】】十年〈當日本仁治二年辛丑歲〉正嫡わづかに五十代〈至先師天童淨和尚〉西天二十八代代代住持しきた~~る~~【り】東~~方~~【地】二十三世世世~~に~~住持しきた~~る五家祖師~~【十方の佛祖】ともに

＊「仏性」巻冒頭の【【　】】に入れた部分は《仏性》の最初の頁であり、これは欠損している。

＊「きたる」→「きたり」・「東方」→「東地」

＊「五家祖師」→「十方の仏祖」

住持せり世尊道の一切衆生悉有佛性は、その宗旨いかなるべきぞ一切衆生は【む】是什麼物恁麼来なりといへどもしばらくこれを【の道轉法輪なりあるひは】衆生といふ【ひ】あるいは有情といふ【ひ】群生といふ【ひ】【群類といふ】悉有の言ままに審細にすべし悉は悉皆の宗旨あり悉は知なる道理もあるべし悉は照なりと説著せる道理もありたとひ悉皆なりともたとひ悉知なりとも悉照なりともいまの衆生を悉有する道理には違せざるべし悉有の言を【は衆生なり群有也】すなはち衆生と学する道理もありいまは佛性を一切衆生に悉有なりしれるなり【悉有は佛性なり悉有の一悉を衆生といふ】正當恁麼時は衆生の内外これ【すなはち】佛性の悉有なりあらたは単伝する皮肉骨髄あるべからず【のみにあらず】汝得吾髓なるがゆへに汝得吾骨なるがゆへに汝得吾肉なるがゆへに汝得吾皮なるがゆへは【皮肉骨髄なるがゆへに】しるべしいま佛性に悉有せらるる有は有無の有にあらず有無の有に相似せる論におよばずもし有無の有に相似せしめんとするは隨語の情解に墮在せるなりいまだ解脱の学にあらず悉有よく【は】佛語を参学すべしさらに外道および論師の少見をならふべからず【なり佛舌なり佛祖眼睛なり衲僧鼻孔なり】悉有の言さ

*「いかなるべきぞ」という問いかけのかたちや、「しばらく」という仮定的表現を、断定的表現に改めている。

*「悉有」の悉についての「…もあるべし」「…もあり」「たとひ…なりとも」というような周到な文章を削除して断定的な表現に変えて、明確にしている。

*「悉有の言をすなはち衆生と学する道理もあり」という表現を「悉有の一悉を衆生という」という断定的表現に改めている。

*皮・肉・骨・髄をまとめて、文章を簡潔化している。

*この部分は「悉有」の有が「有無」の有ではないことを示すのに、再治前は「解脱の学にあらず」あるいは「外道および論師の少見をならふべからず」と否定や批判の文を付け加えているが、再治後はこれらを削除して簡潔に「悉有」が仏語であることをのみ述べて明確にしている。

らに始有にあらず本有にあらず妙有等にあらずいはんや縁有妄有にかかはれんや悉有はるかにかくのごとくの境界にあらざるなり【ならんや】心境性相等にかかはれずしかあればすなはち衆生悉有の依正しかしながら業増上力にあらず妄縁起にあらず法爾にあらず【神通修證にあらず】もし衆生の悉有それ業増上および縁起法爾等ならば【ならんには】諸聖の證道および諸佛の菩提も【佛祖の眼睛も】業増【上】力および縁起法爾なるべししかあらざるなりいたづらに小見孤疑のやから佛見法見をもてしばらく佛邊究竟所とするがゆへにかくのごとく邪解あるなりすでに業増上力にあらずいはゆるいかなる業いかなる業を増上せしむべきに世【盡】界はすべて客塵なし直下さらに第二人あらず直截根源人未識忙忙業識幾時休なるがゆへに妄縁起の有にあらず偏界不曾蔵のゆへに偏界不曾蔵といふはかならずしも滿界是有といふにあらざるなり偏界我有は外道の邪見なり本有の有にあらず亙古亙今のゆへに始起の有にあらず不受一塵のゆへに【條條の有にあらず】合取のゆへに無始有の有にあらず是什麼物恁麼来のゆへに始起有の有にあらず平常心是道のゆへにまさにしるべし悉有中に衆生快便難逢なり悉有を會取することかくのごとくなれば

＊ここも否定の文を削除して簡潔にしている。

＊「ならば」→「ならんには」

＊「上」は脱字を加えたものか。書写の段階の書脱か。

＊「小見弧疑のやから」の見解に対する批判の部分を削除している。

＊前後が「……ゆへに……あらず」となっており、「條條の有にあらず」は、これらのかたちに合わせて「不受一塵のゆへに」の後に挿入したものか。あるいは書写の段階の書脱か。

悉有それ透體脱落なり佛性の言をききて學者おほく先尼外道の我のごとく邪計せるがごとし【り】それ人をみず師にあはざるにより【にあはず自己にあはず師をみざるゆへなり】いたづらに風火の動著する心意識は【を】佛性の覺知覺了とおもへるいくばくの邪見ぞ【り】たれかいふし佛性に覺知覺了ありと覺者知者はたとひ諸佛なりとも佛性は覺知覺了にあらざるなりいはんや諸佛を覺者知者といふ覺知はなんだちが云云の邪解を覺知とせず風火の動静を覺知と相承するとはなまなりただこれ即即の諸法を覺知とは單傳直指せるゆ【するにあらずただ一兩の佛面祖面これ覺知なり】往往に古老先徳あるひは西天に往還しあるひは人天を化道する【漢】唐家より宋朝にいたるまで稲麻竹葦のごとくなるおほく風火の動著を佛性の知覺とおもへるあはれむべし學道轉疎なるによりてしかの【いまの】失誤をまねくなり【あり】いま佛道の晩學初心しかあるべからず、たとひ覺知を學習すとも覺知は動著にあらざるなりたとひ動著を學習すとも動著は恁麼にあらざるなりもし眞箇の動著を會取することあらば眞箇の覺知覺了を會取すべきなり佛之與性達彼達此なるべし【なり】佛性かならず有なり悉有は佛性なるがゆへに悉有は百雑碎にあ

＊「せるがごとし」→「せり」　表現の断定化

＊「人をみず」を「人にあわず」に変え、さらに「自己にあはず」を挿入している。

＊「いたづらに風火の動著する心意識は仏性の覚知覚了とおもへる、いくばくの邪見ぞ」という表現を、「いたづらに風火の動著する心意識を仏性の覚知覚了とおもへり」と、わかりやすい表現にしている。この部分の主語（主部）は「諸仏を覚者知者という覚知は」であり、上の「邪解を覚知とせず」に合わせて、「風火の動静を覚知とするにあらず」と整え、また「相承」「単伝直指」という〝伝える〟表現を「仏面祖面」という〝現ずる〟表現に変えている。

＊「この失誤をまねくなり」→「いまの失誤あり」

「まねく（招く）」を「あり」に変えている。「まねく」は、招くことのない可能性を内に含む表現であると思われるが、これを改めて「あり」という確定表現にしている。

＊「なるべし」→「なり」　表現の断定化

らず悉有は一條鐵にあらず【拈拳頭なるがゆへに大小にあらず】すでに佛性といふ諸聖と斉肩なるべからず【佛性と斉肩すべからず】~~すでに恁麼ならば餘類に説似すべからざるなり~~~~諸聖並及餘類の境界にあらざらんはこれ箇々現成人々具足なるべし~~ある一類おもはく佛性は草木の種子のごとし法雨のうるひしきりにうるほすとき芽茎生長し枝葉華果もすことあり果實さらに種子をはらめりかくのごとく見解する凡夫の情量なりたとひかくのごとく見解すとも種子および華果ともに條々の赤心なりと参究すべし果裏に種子あり種子みえざれども根茎等を生ずあつめざれどもそこばくの枝條大圍となれる内外の論にあらず古今の時に不空なりしかあればたとひ凡夫の見解に一任すとも根茎枝葉みな同生し同死し【同】悉有なる佛【性】なるべし

佛言欲知佛性義當觀時節因縁時節若至佛性現前いま佛性義をしらんとおもはばといふはただ知のみにあらず行ぜんとおもはば證せんとおもはばとかむとおもはばともわすれんとおもはばともいふなりかの説行證忘錯不錯等もしかしながら時節の因縁なり時節の因縁を觀ずるには時節の因縁をもて觀ずるなり【拂子拄杖等をもて相觀するなり】さらに【有漏智無漏

＊再治前は、悉有は仏性であってそれは諸聖の境界とも余類の境界とも異なるとし、「箇々現成、人々具足」と示していたが、再治後には、余類の部分を削除し「仏性と斉肩すべからず」を加えている。これは、思うに「箇々現成、人々具足」という現成あるいは具足の語が、仏性について誤解を生ずる可能性があると考え削除したものであろうか。「仏性と斉肩すべからず」の語を加えたのは、すでに悉有は仏性であるのであるから、更にこの悉有に仏性を重ねなくてもよいという意であろうか。

＊「みな」は根・茎・枝・葉を指すと思われるが、これが「同生し同死し」という意であり、これに合わせて「同悉有」と同の字を加えたものか。また「仏」を「仏性」と変えたことに重要な意味があるのかわからないが、あるとすれば、これら（根茎枝葉）はそのまま仏ではなく「仏性」であると区別したことになる。

＊いわゆる「智」でもって観ずるのではないことを「払子拄杖等をもて相観するなり」という語を加えて明確にし

智】本覺始覺無覺正覺等の智をもちゐるには觀ぜられざるなり當觀といふは能觀所觀にかかはるべきにあらず【かかはれず】正觀邪觀等に準ずべきにあらずこれ當觀なり當觀なるがゆへに不自觀なり不佗觀なり時節因緣暫なり【超越因緣なり】佛性暫なり【脱體佛性なり】佛々暫なり性々暫なり時節若至の道をままて古今のやから往往におもはく佛性の現前する時節の向後にあらんずるをまつなりとおもへりかくのごとく修行しゆくところに自然に佛性現前の時節にあふ時節いたらざれば參師問法するにも辦道功夫するにも現前せずといふ恁麼見取していたづらに紅塵にかへりむなしく雲漢をまほるかくのごとくのたぐひおそらくは天然外道の流類なりいはゆる欲知佛性義はたとへば當知佛性義といふなり當觀時節因緣といふは當知時節因緣といふなりいはゆる佛性をしらんとおもはばしるべし時節因緣これなりこの時節いかなりとあきらめがたしといへども佛時節因緣あずかに説著するにこれこの道得ありしりぬこれ佛性なりといふことを時節若至といふはすでに時節いたれりなにの疑著すべきところかあらんとなり【疑著時節さもあらばあれ還我佛性來なり】しるべし時節若至はたあれば【は】十二時中不空過なる佛性なり【なり】若至は

ている。また、仏性を知るのに用いない「智」に「有漏智・無漏智」を加えている。

＊「かかはるべきにあらず」→「かかはれず」表現の断定化

＊前の部分を受けて、時節の因緣を觀ずるには自ら觀ずるのでもなく、時節因緣そのもの（自体）で觀ずる（「暫」は〝そのもの〟〝それ自体〟の意）と示し、その後に「超越因緣なり」の語を加えている。この語を加えたのは〝時節因緣そのもので觀ずる〟ということが、その因緣をも超えたものであるということであろうか。つまり、その時節因緣そのもので觀ずるということにもとらわれてはいけないということであろう。「仏性暫」のあとに「脱体仏性なり」を付け加えたのもおそらく同様であろう。「超越」「脱体」と言葉を変えているが、同じ概念であろう。

＊「ききて」（8行前）を削除　＊不必要な語の削除

＊「この時節いかなりとあきらめがたしといへども」という〝はっきりしないが〟というような示し方を、後に削除したものか。

＊「にてあれば……なる…なり」（……であれば…であるところの…である）という表現を、端的に「……は……な

既至といはんがごとし【時節若至すれば佛性不至なり】しかあればすなはち時節すでにいたればこれ佛性の現前なり【あるひは其理自彰なり】おほよそ時節の若至せざる時節いまだあらず佛性の現前せざる佛性あらざるなり佛性因縁中不依倚一物なり

第十二祖馬鳴尊者十三祖のために佛性海をとくにいはく山河大地皆依建立三昧六通由茲發現しかあればこの山河大地みな佛性海なりすでに建立の正當なり【皆依建立といふは建立せる正當恁麼時これ山河大地なりすでに皆依建立といふしるべし佛性海のかたちはかくのごとし】さらに内外中間にかかはるべきにあらず恁麼ならば山河をみるは佛性をみるなり【山をみるは佛性をみるなり河をみるは佛性をみるなり】佛性をみるは驢腮馬觜をみるなり皆依は全依なり依全なりと會取し不會取する皆依なり佛性はかならず山河大地に皆依なりと参究すべきなり【なり】三昧六通由茲發現しるべし諸三昧の發現来現おなじく皆依佛性なり全六通の由茲不由茲ともに皆依佛性なり六神通はただ阿笈摩教にいふ六神通にあらず六といふは前三三後三三なるべし【を六神通波羅蜜といふ】しかあれば六神通は明明百草頭明明佛祖意なりと参究することなか

り」（……は……である）と改めている。

＊「現前」に加えて「自彰」（おのずからあきらかなり）を示している。これは「現」（現れる）ということに対する誤解をまねかないように付け加えたものか。現とは内からあらわれるのではなく、彰らかであることを示したものか。ちなみに「彰」も〝あらわれる〟という意をもつが、それは顕著にあらわれるという意味。

＊再治前の「すでに建立の正当なり」のみでは、意味を解し難かったが「皆依建立といふは建立せる正當恁麼時これ山河大地なり……」と改められ明確になっている。

＊この部分は「山河」の山と河を分けて示している。全体的には文章の簡略化が行われているが、この部分は逆である。しかし、わかりやすくなっている。

＊「不会取する皆依なり」とは〝不会取する、（これが）皆依である〟という表現であると思われる。これ以下、「仏性はかならず山河大地に皆依なりと参究すべきなり」は、このことを重ねて確認した部分であるが冗長であるので削除して「なり」と簡潔にしたものか。

＊「なるべし」を「を六神通波羅蜜といふ」と改めたこと

れ六神通すでに發現する参究なり六神通に滞累せしむといへども佛性海の朝宗に罣礙するものなり

五祖大滿禅師蘄州黄梅人也無父而生童兒得道乃栽松道者也初在蘄州西山栽松遇四祖出遊告道者吾欲伝法與汝汝已年邁若汝再来吾尚遅汝師諾遂往周氏家女托生因抛濁港中神物護持七日不損因収養矣至七歳為童子於黄梅路上逢四祖大醫禅師祖見師雖是小兒骨相奇秀異乎常童祖見問曰汝何姓師答曰姓即有不是常姓祖曰是何姓師答曰是佛性祖曰汝無佛性師答曰佛性空故所以言無祖識其法器俾為侍者後付正法眼蔵居黄梅東山大振玄風

しかあればすなはち祖師の道取を参究するに四祖いはく汝何姓はその宗旨ありむかしは何國人の人あり何姓の姓ありなんぢは何姓と為説するなりたとへば吾亦如是汝亦如是と道取するがごとし五祖いはく姓即有不是常姓いはゆるは有即姓は常姓にあらず常姓は即有に不是なり四祖いはく是何姓は何は是なり是を何しきたれりこれ姓なり何ならしむるは是のゆへなり是ならしむるは何の能なり姓は是也何也なりこれを蒿湯にも點ず茶湯にも點ず家常の茶飯ともするなり五祖いはく是佛性いはくの宗旨は是は佛性なりとなり何のゆへに佛なるなり是は何姓のみに究取しきたらんや是すでに不是のとき佛姓なにより意味が明確になっている。

*この部分で「六神通」は良い意味で用いられているものと悪い意味で用いられているものが混在する説示となりわかりにくくなっている。先の「六神通はただ阿笈摩教にいふ六神通にあらず」とは、正伝の仏法における六神通は、単に阿含経の教えにあるような六神通ではない」という意であり、以下さらに注意を促している。「六神通すでに発現する参究なり」の語が削除された意図は不明であるが、「すでに発現する」という表現が関わるものであろうか。

*「その姓すなはち周なり」（6行後）という部分は、姓は常姓ではないという否定の上での肯定であろう。「周」という姓であってもそれは仏の姓であり、「周」という姓が「仏性」ではないというのではないのである。だからこそ「周」は単に父に受けた姓ではなく、また祖に受けた

りしかあればすなはち是は何なり佛なりといへども脱落しきたり透脱しきたるにかならず姓なりその姓すなはち周なりしかあれども父にうけず【祖にうけず母氏に相似ならず傍觀に斉肩ならんや】四祖いはく~~すなはち~~汝無佛性いはゆる道取は汝はたれにあらず~~といへども~~汝に一任すれども無佛性なりと開演するなりしるべし學すべしいまはいかなる時節にして無佛性なるぞ佛頭にして無佛性なるか佛向上にして無佛性なるか七通を逼塞することなかれ八達を摸索することなかれ無佛性は一時の三昧なりと修習することもあり佛性成佛のとき無佛性なるか佛性發心のとき無佛性なるかと問取すべし道取すべし露柱に~~も~~【をしても】問取せしむべし露柱にも問取すべし【佛性をしても問取せしむべし】しかあればすなはち無佛性の道はるかに四祖の祖室よりきこゆるものなり黄梅に見聞し趙州に流通し大潙に擧揚す無佛性の道かならず精進すべし赼趄することなかれ無佛性たどりぬべしといへども何なる標準あり汝なる時節あり是なる投機あり周なる同生あり直趣なり五祖いはく佛性空故所以言無あきらかに道取す空は無にあらず佛性空を道取するに半斤といはず八兩といはず無と言取するなり空なるゆへに空といはず無なるゆへに無といはず佛

ものでもなく母氏によったものでもないと言われるのである。道元禅師はこのことを示すためにこのような表現をしていると思われる。

＊「すなはち」は不必要な語であるので削除したものか。

＊「…といへども…すれども」という説示では「…ども」という表現が重複しているので「といへども」を削除したものか。

＊この部分は、〝露柱から私に問わせるべきである。露柱に私が問うべきである〟という説示であるが、〝露柱から問わせる〟ということであれば「露柱にも」ではなく「露柱をしても」の方が正確であり、ゆえに変更したものと思われる。そしてそれは「仏性」そのものにも問わせるべきであるということで、「仏性をしても問取せしむべし」と加えているのであろう。当然この語の後に「仏性にも問取すべし」という語が省略されているとみるべきである。

性空なるゆへに無といふときこゆしかあれば無の片片は空を道取する標榜なり空は無を道取する力量なりいはゆるの空は色即是空の空にあらず色即是空といふは色を強為して空とするにあらず空をわかちて色を作家せるにあらず空是空の空なるべし空是空の空といふは空裏一片石なり是即是ならば何も姓なるべしといへども何姓是なるときは説似一物即不中なりきわに不逢一人なるべしかあればすなはち佛性無と佛性空と佛性有と四祖五祖問取道取

震旦第六祖曹谿山大鑑禅師そのかみ黄梅山に参ぜしはじめ五祖とふなんぢいづれのところよりかきたれる六祖いはく嶺南人なり五祖いはくきたりてなにごとをかもとむる六祖いはく作佛をもとむ五祖いはく嶺南人無佛性いかにしてか作佛せんこの嶺南人無佛性といふ嶺南人は佛【性】なしといふにあらず嶺南人は佛性ありといふにあらず嶺南人無佛性としめすゆ【なり】いかにしてか作佛せんといふはいかなる作佛をか期するといふなりおほよそ佛性の道理あきらむる先達すくなし諸阿笈摩教および経論師のしるべきにあらず佛祖の兒孫のみ単伝するなり佛性の道理は佛性【は】成佛よりさきに具足せるにあらず成佛よりのちに具足するなり【佛性かならず成

＊「ときこゆ」（～と聞こえる・～と理解できる）という表現を削除して断定的表現にしている。

＊この部分は「五祖いはく、仏性空故所以言無」の部分についての拈提の部分であり、空の意義について論じている部分なので「是何姓」に関する説示を削除したのであろうか。しかしながら、「是何姓」についてさらに説明したものとして私にはわかりやすく参考になる部分でもある。決してこの削除された部分の内容の否定ではなかろう。

＊「性」は明らかに脱字であり、付け加えたもの。

＊「は」は脱字を補ったもの。

＊「仏性かならず成仏と同参するなり」の語が加わること

佛と同参するなり】この道理よくよく参究功夫すべし三二十年も功夫参學すべ~~きなり~~【し】十聖三賢のあきらむるところにあらず衆生有佛性衆生無佛性と道取する~~ところは~~この道理なり成佛已来に具足する法なりと参學する~~を~~正的~~として学すべきなり~~【なり】かくのごとく學せざるは佛法にあらざるべし【かくのごとく學せずば佛法あへて今日にいたるべからず】もしこの道理あきらめざるには成佛をあきらめず見聞せざるなり

＊以下修訂ほとんどなし

一頁六行書き六十三紙よりなるが、主な修訂は十九紙までで、後は一文字程度の誤字脱字の修訂が数カ所あるのみ。

~~佛性~~

正法眼蔵佛性第三

~~仁治二年辛丑十月十四日記于觀音導利興聖寶林寺~~

同四年癸卯正月十九日書写之　懐奘

によって意味がより明確になっている。

＊「すべきなり」→「すべし」　説示の強調

＊「ところに」は不必要な語として削除されたと思われる。

＊「正的として学するべきなり」→「正的なり」断定・強調

＊「かくのごとく学せずば仏法あへて今日にいたるべからず」は前の部分を強調して述べたもので、このように学んだからこそ、今日私に正しい仏法が伝わっているという確信を述べたもの。

＊「佛性」と書かれた上に「正法」と重ね書きされ、その下に続けて「眼蔵佛性第三」と書き加えられている。この奥書から、再治前（仁治二年十月十四日）『正法眼蔵』という総合的編集本として列次が定められていなかったものが、仁治四年に懐奘によって書写された時点では、

爾時仁治二年辛丑十月十四日在雍州觀音導利興聖寳林寺
示衆　　再治御本之奥書也

正嘉二年戊午四月廿五日以再治御本交合了

道元禅師によって「第三」という列次番号が付され、『正法眼蔵』の編集がすでに行われていたことが知られる。

結論

道元禅師は、『正法眼蔵』を再治修訂し、あるいは書き改めて完成させていったことが知られるが、とすれば、そこには思想的修正があったとも考えられる。このことは、『普勧坐禅儀』や『辦道話』をはじめとする、再治修訂が行われた文献や、本論で取り上げた《仏性》のような、現存する、再治修訂の痕跡をとどめる文献によって検証しなければならない。しかしながら、《仏性》の再治修訂には道元禅師の思想（仏法に対する見解）に関わる改変や修正は感じられない。下段に、修訂に関する筆者のコメントを付したが、ここに見られる修訂は、そのほとんどが文章の修辞（表現の最適化）や明確化、簡略化、断定化等、文章の構成や表現などに関わるものであって、思想的修正（仏法に対する見解の修正）は見られないと結論づけたい。

私は『正法眼蔵』のすべてを道元禅師の思想的研究のための資料として認めるが、それは、このような再治修訂が『正法眼蔵』全体にわたって綿密に行われ、完成され最適化されたものとして遺されたと考えるからであり、道元禅師がさらに長生きされ法臘を重ねられたならば重ねて再治修訂があったかも知れないにせよ、道元禅師示寂時においては、遺された『正法眼蔵』の巻々は道元禅師自身によってそのすべてがその時点での完成された撰述として認められていたと確信するからである。

＊本稿は、平成十一年九月九日に開催された日本印度学仏教学会第五〇回学術大会（於京都龍谷大学）において「『正法眼蔵』の再治について」と題して発表したものを、まとめたものである。尚、本発表では、この再治の実態を、道元禅師の思想変化に関わる他の諸問題と関連して述べたが、本稿では再治の問題にのみ絞って論じた。

註

（1）『道元禅師真蹟関係資料集』（『永平正法眼蔵蒐書大成』別巻、昭和五十五年十一月、大修館書店刊）の解題（小坂機融解題）には、

○本文六五九頁

○福井県吉田郡永平寺町・永平寺所蔵

○冊子本、縦22・8cm　横15・7cm

本書は祖山本仏性巻と呼ばれ、表紙に

二祖懐奘禅師御真筆　正法眼蔵仏性巻　六拾参紙　明治四十一年九月吉日　六十四世代改装

とある如く、一頁六行書き六十三紙（一二六頁）よりなるものであるが、惜しいことに最初の頁が缺損し、その部分を片仮名書きで補っているので本来は六十四紙（一二七頁）であったと思われる。

本書は、もと道元禅師が仁治二年（一二四一）に示衆された「仏性」（草案本）を同四年（一二四三）弟子懐奘が書写し、後に道元禅師が再治された御本によって正嘉二年（一二五八）に校合し、本文を抹消・書き換え、あるいは挿入増補によって修訂されたものである。最初の奥書は、

佛性

仁治二年辛丑十月十四日記于観音導利興聖寶林寺

同四年癸卯正月十九日書寫之　懐奘

であるが、再治本の奥書は

正法眼蔵佛性第三
爾時仁治二年辛丑十月十四日在雍州観音導利興聖寶林寺示衆
再治御本之奥書也
正嘉二年戊午四月廿五日以再治御本交合了

と改められたことになる。これによって道元禅師の『正法眼蔵』選述の道程が、最初「佛性」という別號のみであったものから、「正法眼蔵」という總題號に統一され、「第三」という次序によって編輯されていったことが窺われる。とあり、また、本書の末尾に付されている跋文の内容から、「この跋文は、何れの根拠によるか明らかではないが、この草紙が、道元禅師の興聖寺において記せられた本について懐奘が書寫し、道元禅師の永平寺において再治せられた本をもって三代義介が傍書修訂して出来上がったという事情を明らかにしている」と述べている。